

ちなみに、四年制大学に在籍する専門高校出身者に成績不振の学生が多いという表9の結果は、決して擬似的な関係ではない。たとえば、専門高校出身者における四年制大学入学後の学力的なハンデが専門高校のカリキュラムによるものではなく、単純に推薦入試を受験して入試の勉強を行わなかったためであるのなら、推薦入試で入学した学生のみで比べると出身学科ごとに成績に差はでないはずである。しかし、推薦入試や附属校からの進学で入学した生徒同士で出身学科ごとに成績の比較を行うと、結果的に表9と同じ傾向が見られる(表12)。

表12 四年制大学における推薦入学者の成績

		学校での成績				合計
		D:0~59点	C:60~69点	B:70~79点	A:80~100点	
推薦入試・ 附属校から の進学	普通科上位校	3.0%	15.2%	55.6%	26.3%	(99)
	普通科下位校	5.3%	21.1%	52.6%	21.1%	(38)
	専門学科	3.7%	40.7%	33.3%	22.2%	(27)
	合計	3.7%	20.7%	51.2%	24.4%	(164)

(p=0.147)

注) 期待度数が5.0以下のセルがあるため、()内の有意確率は参考

また、サンプルにおける大学の専門分野の偏りの影響も考えられたが、専門分野を統制して成績を確認しても、やはり専門高校出身者に平均の成績がCである学生は多い。今回の専門高校出身者のサンプルでは、27人中社会科学系の学生が13人、理工系の学生が8人いるが、成績の平均がCである学生は、社会科学系においては普通科上位校20.9%≒普通科下位校20.0% < 専門学科37.5%と多く、また理工系は普通科下位校出身者が少ないので普通科上位校とのみ比較するが、普通科上位校23.7% < 専門学科38.5%である。これより、専門高校出身者の勉強の困難の表出はサンプルの専門分野の偏りの影響によるものではないと考えることができる。

また、性別や家庭の経済階層においても同様に、出身学科ごとにサンプルの比率に偏りはあるものの、専門高校出身者と成績の関係はそれらの偏りによる擬似的なものではないと言える⁽⁶⁾。確かに「第2回追跡調査」を用いたこの分析ではサンプル数の少なさやバイアスという問題が伴うものの、それでも、主に教養科目を学ぶ大学1・2年時では専門高校出身者には普通科出身者に比べて勉強に苦しむ学生が多いと推測してもよいであろう。

4.2 四年制大学在籍者の時間配分

前節では専門高校からの四年制大学進学者には大学1・2年時に勉強に苦しめられている学生が一定数存在する可能性を指摘したが、もちろん専門高校出身者の中にも成績の平均がAやBである学生が多数いることを忘れてはならない。しかし、彼らの成績は普通科の生徒を上回る勉強量によって支えられている。「第2回追跡調査」を用いて四年制大学の学生の1週間の授業以外の勉強時間を確認したところ(図4)⁽⁷⁾、成績の平均がAやBである専門高校出身者は普通科出身者に比べ全体的に勉強時間が長い。注目すべきは成績の平均がAである普通科出身者よりも成績の平均がBである専門高校出身者の方が勉強時間が長いということである。これより、専門高校出身者は高校での普通科目の勉強量が不足しているため、教養課程である大学1・2年の間は良い成績を取るには普通科出身者を上回る勉強量が必要とされる可能性が考えられる。

図4 1週間の勉強時間

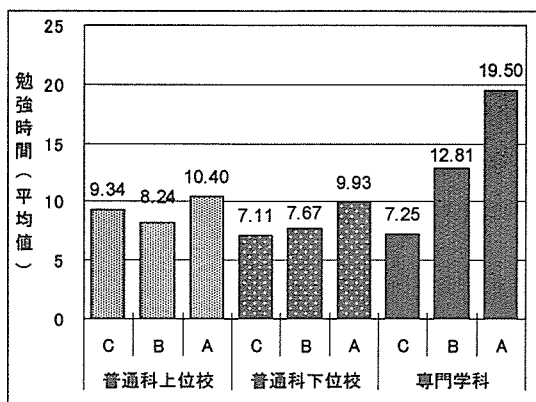
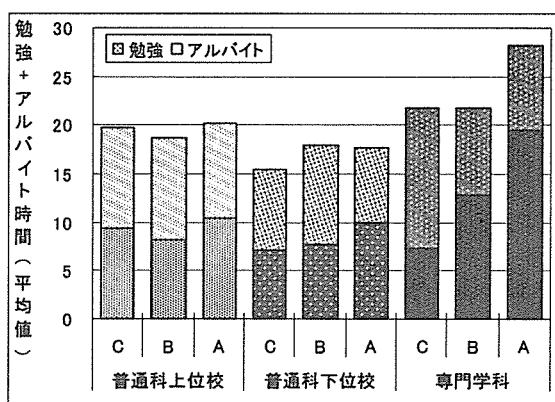


図5 1週間の勉強+アルバイト時間



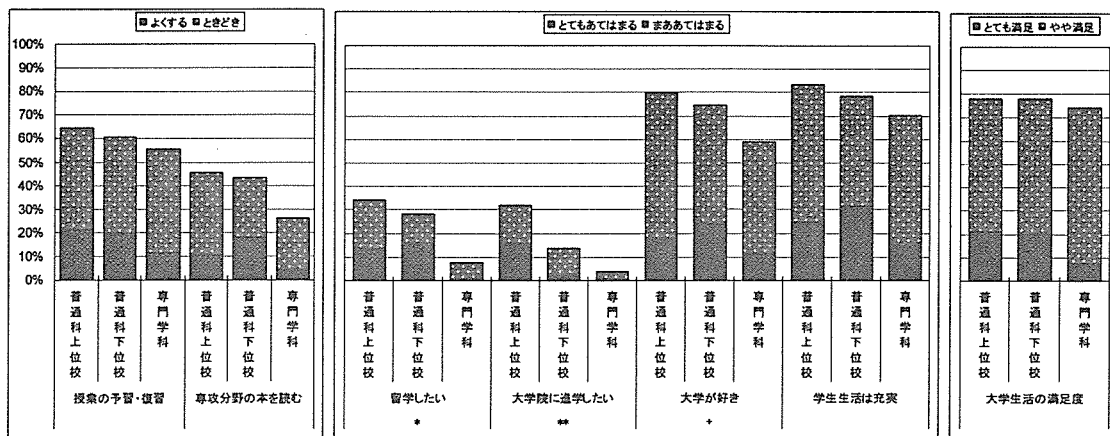
しかし成績の平均がCである専門高校出身者が多いことは先ほど指摘したが、彼らの勉強時間は普通科出身者と同程度（またはそれ以下）である。ただし、彼らは勉強「しない」のではなく「できない」という可能性がある。図5は1週間の勉強時間（下）にアルバイト時間（上）を加えた時間を示したものであるが⁽⁸⁾、平均の成績がCである専門高校出身者はアルバイト時間が他に比べて明らかに長い。彼らは学費や日々の生活費のために長時間のアルバイトが必要になり、その結果勉強に回す時間が足りず、成績不振に陥っているのではないだろうか⁽⁹⁾。

また、図5で特徴的であるのは、専門高校出身者の勉強+アルバイト時間は、どの成績の学生においても普通科出身者のそれを上回る。その結果が彼らの大学生活にどんな影響を及ぼしているのかは、次節で述べる。

4.3 余裕のない大学生活

学方面でのハンデと経済的なハンデを背負う傾向にある専門高校出身者は、どのような大学生活を送っているのだろうか。「第2回追跡調査」で大学生活について尋ねた項目で、結果が特徴的であった7項目を抽出してグラフに示したものが図6～8であるが、彼らの大学生活の行動と意識には、以下の3つの特徴が挙げられる。

図6・7・8 大学生活の行動と意識



第一に、「大学の授業の予習・復習をする」「(教科書以外の) 専攻分野の本を読む」という学生が普通科出身者より少ないということが挙げられる。専門高校出身者の中でも成績が低い学生ほど予習・復習や専攻分野の本の読書をしていない傾向にあり、ここでもアルバイトによる長時間の拘束が彼らに勉強する余力を残させない可能性が示唆される。

第二に、留学や大学院への進学に興味がない傾向がある。専門高校からの進学者にはステータスの向上という視点が弱い傾向があり、また家庭の経済的事情や現状の生活を考えると、大学からさらにアカデミックな世界を広げることは考えづらいのかもしれない。

第三に、大学生活の満足度が普通科出身者ほど高くない。「大学が気に入っている」「学生生活は充実している」学生は普通科出身者に比べて少なく、また大学生活全体の満足度に関して、とても満足しているという学生は普通科出身者に比べて少ない。

このような彼らのネガティブな大学意識の背景には、彼らの生活の時間的・経済的な「余裕のなさ」があるのではないだろうか。長時間のアルバイトなどに忙殺されて普通科出身者を上回る勉強量をこなすことが困難になり、よりアカデミックな世界に没頭することが考えられず、大学生活に納得しきれない状況に置かれている学生が多数いるのではないかと推測できる。

5. おわりに

専門高校からの高等教育への進学はどのようなものであるか、ここでもう一度整理する。専門高校の生徒は普通科の生徒に比べ、普通科目の勉強量の不足という学力面でのハンデと家庭の経済的なハンデを背負っている。しかしそれらの2重のハンデは、入学時には学力検査を回避する推薦入試制度を利用し、また奨学金の利用または長時間のアルバイトを覚悟することによって乗り越えることができる。専門学校や短大への進学者はその後も大きな困難を抱えている様子は今回の分析からは見られないが、四年制大学進学者においては入学時に一度は乗り越えた2重のハンデが押し寄せてくる様子が見られる。彼らの中には時間的・精神的に余裕のない生活を強いられ、成績不振、大学生活に対する不満などの問題を抱えるようになるものも多い。専門高校から四年制大学への接続は、決してうまくいっているとは言えない。

では、専門高校出身者の四年制大学への進学後の困難を取り除くには、何が必要であるだろうか。本稿の分析結果に照らして考えると、彼らに押し寄せる2重のハンデをいかに取り除くかが重要であると思われる。

まず第一に、彼らの学力的なハンデを埋め合わせる体制が作られる必要があるだろう。荒川(2000)によると、専門高校における進学者向けの補習は一般受験に向けた教科学習ではなく、公募制推薦入試に向けた面接指導・小論文指導が主な内容になっているということを指摘している。また、79年度と97年度の教育課程を比較したところ、専門高校の国社理数英の平均単位数は進学志向の高まりがあるにもかかわらず97年度の方が少ないという。専門高校の指導は推薦入試を利用した送り出しに重点が置かれていて、進学後の学力的な不安まで支援が及んでいない可能性があり、大学で必要となるであろう普通科目の補習を行うことを視野に入れる必要があると考える。しかし佐藤(2000)が述べる通り、専門高校は専門化設置の本来の目的から大きく逸脱して、受験科目となる普通教科に偏った教育課程を組むわけにはいかない。そのため、大学側からも高校のカリキュラムを把握し、それに応じた補習教育を行うなどの歩み寄りがなされるべきであろう。

第二に、家庭の経済的なハンデを大学生活の困難に結びつけないようにするには、奨学金の

利用は有効な手段であるだろう。奨学金とアルバイトの関係は表5に示していたが、奨学金をもらっている学生に関しては、1週間に21時間以上アルバイトをしている学生が奨学金をもらっていない学生に比べて少ない。奨学金をもらうことで長時間のアルバイトの必要性が薄れ、ひとまず大学生活の間は少し余裕のある生活を送ることができるだろうと考えられる。高校での進路指導などで奨学金の効用について説明を行うことで、彼らが抱えるであろう大学生活の余裕のなさを緩和させることができるのではないだろうか。

最後に、専門高校出身者の学力面での困難について述べてきたが、彼らの学力が“劣っている”わけではない、ということをおきたい。専門高校からの進学者には、特定の専門科目の入門的な学習を先取りしているというアドバンテージもある（吉本1997、佐藤2000）。専門的な内容が中心となる大学3・4年生になると、彼らの高校での経験は圧倒的に有利に働く可能性がある。しかし現状では、大学1・2年生における困難のために、スキルアップ志向による彼らの教育内容に対する強い関心が削ぎ落とされてしまう危険性がある。彼らが充実した大学生活を過ごすことができるよう、専門高校から四年制大学への接続について議論を進めていく必要があるだろう。

[注]

(1) 専修学校には高等学校卒業以上を入学資格とする「専門課程」の他に、中学校卒業以上を入学資格とする「高等課程」、学歴不問の「一般課程」の3つの課程がある。

(2) 文部科学省「学校基本調査」平成18年度より。

(3) 「第2回追跡調査」でも在籍する学校への入学形態を尋ねている項目があるが、それによると専門学校在籍者では普通科出身者と専門高校出身者に明確な差は見られなかったものの、短大在籍者では一般入試によって入学した専門高校出身者は16人中3人(18.8%)と普通科上位校(48.3%)、普通科下位校(27.8%)より少ない傾向にある。四年制大学在籍者に至っては、専門高校出身者は27人全員が推薦入試による入学であった。

(4) ただ、この結果は「第2回追跡調査」のサンプルバイアスに少なからず影響されているものと思われる。「高校生調査」には家庭の経済状態を尋ねる質問が含まれていないため、家庭の経済階層についてはサンプルが少なく、またサンプルバイアスを伴うという問題を抱えながらも「第2回追跡調査」の回答結果を利用している。

(5) 普通科上位校では15.0%、普通科下位校では24.8%である。

(6) 性別で統制した結果については、女子で専門学科のサンプルが非常に少ないことが難点であるが、成績の平均がCである学生は男女ともに専門高校出身者に多いことが確認できる(付表1)。家庭の経済階層については、そもそも全体的な傾向として、階層間に成績の差は見られない(付表2)。専門高校では経済的に豊かでない家庭の生徒が多く進学しているが、この結果では家庭が豊かでないと回答した学生に成績の平均がAである学生が多いという特徴がある。

付表1 四年制大学における性別と成績の関係

		学校での成績				合計
		D:0~59点	C:60~69点	B:70~79点	A:80~100点	
男	普通科上位校	6.0%	17.2%	61.2%	15.5%	(116)
	普通科下位校	13.6%	18.2%	63.6%	4.5%	(22)
	専門学科	5.0%	45.0%	40.0%	10.0%	(20)
	合計	7.0%	20.9%	58.9%	13.3%	(158)
女	普通科上位校	0.8%	13.4%	52.1%	33.6%	(119)
	普通科下位校	3.4%	17.2%	55.2%	24.1%	(29)
	専門学科	0.0%	28.6%	14.3%	57.1%	(7)
	合計	1.3%	14.8%	51.0%	32.9%	(155)

(p=0.079+)

(p=0.379)

付表2 四年制大学における家庭の経済階層の成績の関係

		学校での成績				合計
		D:0~59点	C:60~69点	B:70~79点	A:80~100点	
経済階層	上位	2.9%	16.7%	59.8%	20.6%	(102)
	中位	3.2%	19.1%	55.9%	21.8%	(188)
	下位	10.3%	15.4%	33.3%	41.0%	(39)
	合計	4.0%	17.9%	54.4%	23.7%	(329)

p=0.027*

(7) 四年制大学の在籍者に1週間の勉強時間を尋ねた項目で「家」と「大学(授業時間を除く)」における勉強時間を足し合わせたものを「1週間の勉強時間」とした。これらは選択肢が「まったくしない」「1時間未満」「1~3時間」「4~6時間」「7~9時間」「10~12時間」「13~15時間」「16~20時間」「21時間以上」の9つに分けられていて、連続変数として扱うために中央値に再割り当てし「0」「0.5」「2」「5」「8」「11」「14」「18」「21」時間とみなした。

(8) ここでは1週間のアルバイト時間を尋ねた項目の「まったくしない」「1~5時間」「6~10時間」「11~15時間」「16~20時間」「21~25時間」「26~30時間」「31~35時間」「36~40時間」「41時間~」という10つの選択肢について、連続変数として扱うために中央値に再割り当てし、「0」「3」「8」「13」「18」「23」「28」「33」「38」「41」時間とみなした。

(9) 四年制大学での専門高校出身者の学力面の厳しさや経済的な厳しさは、調査票の自由記述からも知ることができる。「第1回追跡調査」の自由記述(「高校卒業後、半年の経験を通して感じたこと」)では、四年制大学に進学した専門高校出身者が以下のように語っている。

- ・ 工業高校から国立大学に行く勉強についてくのが辛すぎる。アルバイトはほどほどにしないと勉強がおろそかになるし、体調もくずす。〔工業科出身、男〕
- ・ 学費や自動車学校の費用を自分で負担しない人があることにとってもおどろかされた。自分で選んだ道なら、自分で何とかするべきだと思う。〔工業科出身、女〕

[参考文献]

荒川葉 2000, 「学習指導組織・進路指導組織」樋田・耳塚・岩木・荻谷編『高校生文化と進路形成の変容』学事出版, 83-106頁

本田由紀 2005, 『若者と仕事 —「学校経由の就職」を超えて』東京大学出版会。

本田由紀 2006, 「現実」 — 「ニート」論という奇妙な幻影」本田由紀・内藤朝雄・後藤和智『「ニート」って言うな!』光文社新書, 15-112頁。

福岡哲朗・吉本圭一 2001, 「専門高校の総合的な教育機能に関する比較分析」『産業教育学研究』第31巻第1号, 58-65頁。

- 中村高康 1997, 「大学大衆化時代における入学者選抜に関する実証的研究 —選抜方法多様化の社会学的分析」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第37巻, 77-89頁。
- 中村高康 2006, 「専門高校からの大学進学 —アスピレーションの推移の分析から—」『大阪大学大学院人間科学研究科紀要』第32巻, 125-144頁。
- 佐藤広志 2000, 「職業科高校卒業生の学習歴 —大学等進学者の基礎学力は十分か」『日本教育社会学会第52回大会発表要旨集録』。
- 佐藤(粒来)香 2003, 「宮崎県における高卒就職と職業紹介」耳塚寛明編『高卒無業者の教育社会学的研究(2)』平成13年度～平成14年度科学研究費補助金報告書。
- 矢野眞和 2001, 『教育社会の設計』東京大学出版会。
- 吉本圭一 1997, 「高校と大学との接続関係構築への方向と方策 —実社会への接続を展望した、関係者の連携による多様な接続理念の確立—」広島大学大学教育研究センター編『大学教育と高校教育 —その連続と断絶—』69-74頁。

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

III. 研究成果の刊行に関する一覧表

雑誌

発表者氏名	論文タイトル名	雑誌名	巻号	ページ	発行年
佐藤香	専門学科からの進学	『IDE』	2007年4月号	pp.51-55	2007年

IV. 研究成果の刊行物・別刷

は個別対応になるので、時間がかかり大変だ」という言い分もわからなくもない。だが一般受験者が減り、受験指導や進学補習に割かなければならない時間が減った分、進路決定者の課題対応もできるのではないかというのが私の考えである。進路決定から大学入学までの約半年間に遊ばせず、大学教育のために必要な学力をつけさせ、さらに学問的興味・関心を育むためにはどうすればよいのか。この点で、高校と大学は今こそ連携しなければならない。

修業年限が2年と短い短大においては、入学前の半年間を「プレ・セメスター」と考えて課題を出し、5セメスターでの教育完結を考えているところもある。短大がそのような取組をしているからには、高校側も生徒の学力向上と大学生活へのスムーズな移行を積極的に支援する必要がある。大学では「学習（学修）支援センター」を設置し、学生の学力・意欲向上に努めている。だが、多くの大学で予備校と提携することで初めて学習支援（補習教育）が成り立つということ、高校の教員はまったく知ら

ない。従来の教養部の教員だけで対応できないのであれば、予備校と提携することもかまわない。大切なことは、学生によい教育の機会を与えることだからである。

大学生になったのに予備校の教員の助けを借りるくらいなら、高校時代にもっと学力をつけさせてあげようという雰囲気が高専から生まれてくれば、この連携もさらに進んでいくと思われるのであるが。

(注)

1) 履歴書に四行しか記述のない人。一例として「東大大学院終了、東大助手、東大助教授、東大教授」というもの。これが最も由緒正しいとされる。

(参考文献)

- ・ 瀬尾まいこ『幸福な食卓』2004 講談社 P22
- ・ TBS 世界バリバリレビュー『私は10代で社長になりました』2007年1月31日
- ・ 原孝『米国の大学改革に学べ』2007年1月25日 千葉日報
- ・ 黒川清・石倉洋子『世界級キャリアの作り方』2006 東洋経済新報社 P88

(全国高等学校進路指導協議会大学進学指導研究委員会委員・千葉県立沼南高等学校教諭)

専門学科からの進学

佐藤 香

1. 普通科と専門学科

90年代後半以降、18歳人口減少の影響もあって、大学進学率が急上昇した。2006

年度の学校基本調査によれば、高校普通科の大学・短大進学率は60%に近づき、専門学科¹⁾でも20%に達しようとしている。

広く知られているように、わが国の高校

は、高校入試の偏差値に代表される学力レベルによって序列化され、階層構造を形成している。この序列化は、高校入学段階だけでなく、高校卒業後の進路にも対応している。いわゆる進学校である普通科上位校では90%近い大学進学率であるのに対して、90%近くが就職し、ほとんど進学者がいない専門学科も存在する。例外的な高校も決して少なくないが、おおむね普通科上位校—普通科下位校—専門学科という階層になっており、この順に大学進学率も高いのが一般的である。

こうした中で、多くの高校生は、自分に実現可能な進路が進学であるか就職であるか、進学であれば難関大学か、そうではない大学か、専門学校かといったことを入学時から予期している。そして、その予期された進路を当然のものとして受け入れてきた。ただし、普通科下位校は、やや特殊な位置づけにあったといえる。70年代前半までの普通科下位校では、卒業生の過半数が就職していたが、その後、専門学校進学が増加し、卒業生の進路が大学・短大進学、専門学校進学、就職に3分されるようになり、高校現場で進路多様校と呼ばれるようになった。けれども、普通科上位校と専門学科とは、90年代前半まで、それぞれに特化した進学と就職というふたつの進路に強く「水路づけ」されていた。

強い「水路づけ」が弱体化したのは、バブル崩壊後の長期不況によるところが大きい。高卒労働市場が急速に縮小し、高卒就職者にとって魅力的な求人がきわめて限られたものになってだけでなく、就職すること自体が困難になった。この影響が、いち

はやく現れたのが進路多様校である。90年代半ばには、就職も進学もしない無業者が急増した。同じ頃、専門学科の就職状況は進路多様校ほど厳しくなかったため、無業の問題はさほど深刻ではなかったが、就職率は顕著に減少し始めていた。1990年には約75%であったが、95年には60%にまで低下した。これは、高校入学時に予期していた就職という進路を受け入れなくなった専門学科の高校生が増加したことを意味する。

現在の専門学科にみられる大学進学率の上昇は、基本的には、この流れの中で生じたものである。高校の出口における「強い水路づけ」は弱まったが、高校入学時の序列化がなくなったわけではなく、高校の階層構造そのものは維持されている。もちろん、専門学科からの進学率が上昇する傾向がさらに進展すれば階層構造が大きく揺らぐ可能性はあるが、現状はそこまでいたっていない。このためもあって、専門学科からの大学進学には、いくつかの問題が潜んでいるように思われる。全国の高校生の約3割を占める専門学科からの進学について、データに即して考えてみたい。

2. 進学者の特徴

筆者が所属する東京大学社会科学研究所では、2004年1月に東北・北陸・関東の4県に所在する101校の高校の3月卒業の生徒7,031名を対象とする調査をおこなった²⁾。その内訳は、普通科上位校2,802名、普通科下位校および総合学科2,676名（以下、普通科下位校）、専門学科1,553名である。さらにこの年の11月から毎年、追跡調査を

実施している。この調査の対象者は、現役で大学に進学していれば、2007年4月には4年生になる学生である。

推薦入試を利用した進学先決定

まず、高校在学中の2004年1月データによって、予定されている進路をみておくことにしよう。大学・短大進学を予定している比率は、普通科上位校78%、普通科下位校36%、専門学科21%となっている。

調査時期を考慮すれば、進学先がすでに決定している進学予定者は推薦入試を利用したと考えることができる。短大の進学先決定率は、普通科上位校73%、普通科下位校83%、専門学科92%となり、いずれも大半が推薦入試を利用しているが、とくに専門学科で高い。また、4年制大学の進学先決定率は、普通科上位校40%、普通科下位校65%、専門学科95%で、短大と同様の傾向にある。専門学科の場合、進学先が短大であっても4年制大学であっても、推薦入試を利用しているようである。

推薦入試といっても、いくつもの種類がある。この調査では、指定校推薦入試、公募制推薦入試、自己推薦・AO入試の3種

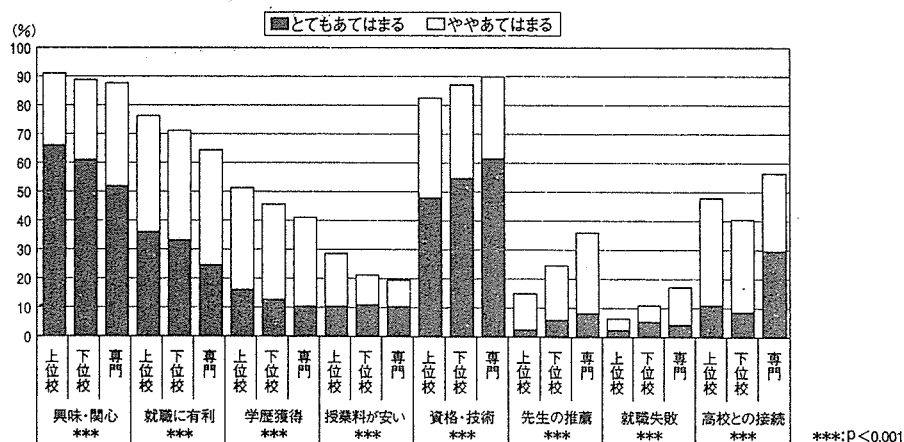
類の推薦入試について、受験経験があるか否かを尋ねている。それぞれの回答をみてみよう。指定校推薦の経験率は、普通科上位校22%、普通科下位校30%、専門学科42%、公募制推薦では普通科上位校20%、普通科下位校38%、専門学科45%である。また、自己推薦・AO入試は、普通科上位校12%、普通科下位校21%、専門学科25%となっている。

進学の志望理由

専門学科からの進学者は、どのような理由で進学先を選んでいるのだろうか。4年制大学進学者についてみてみよう。予定している進学先について、「とてもあてはまる」から「まったくあてはまらない」の4段階で質問した8項目に対する回答を図に示した。

普通科上位校>普通科下位校>専門学科となっているのは、「自分の興味・関心にあつたことが勉強できる」「進学したほうが就職に有利だから」「学歴を得るため」「授業料が安い」の4項目である。やや意外なのは、専門学科で大学進学が就職に有利だと感じている比率が普通科よりも低い点で

図 進学先の志望理由



ある。また、どの学科でも「授業料が安い」とする回答は少数派だが、とりわけ専門学科では少ない。これは、逆にいえば、専門学科からの進学者が授業料負担をとくに強く感じているということである。

上の4項目とは反対に、普通科上位校<普通科下位校<専門学科であるのは、「資格・技術が身につく」「高校の先生にすすめられて」「就職試験に失敗したから」である。もともと専門学科の高校生は実学志向が強い。高校の進路指導でも、大学に進学すれば資格や技術が身につくからと、進学を勧めるとのことである。勧められてはじめて、進学を考え始めるケースも少なくないだろう。

また、専門学科で最も高く、普通科下位校で最も低くなっている項目が「高校で学んだことがいかせる」である。「とてもあてはまる」「ややあてはまる」の合計では、普通科上位校と専門学科との違いは小さいが、着目すべきなのは「とてもあてはまる」の比率である。専門学科からの進学者は、普通科と比較すると、より強く高校との接続を期待している。工業高校から工学部へ、商業高校から商学部へといった進学ルートが、これにあたるだろう。けれども、実は、このルートはそれほどスムーズに接続されているわけではない。

3. どんな大学生生活を送っているか

専門学科からの進学者は、入学後、どのような生活を送っているのだろうか。ここでは、高校卒業から2年目にあたる2005年データをもちいて、4年制大学進学者に限定し、普通科からの進学者と比較しつつ、

みていくこととする。対象となるのは、専門学科出身者45名、普通科出身者278名であるが、サンプル数が少ないため、統計的な検定などは省略し、大まかな傾向をみるにとどめる。

在籍機関と経済状況

高校の出身学科にかかわらず、ほぼ7割が私立大学に在籍している。学部・学科については専門学科出身者で理工系が多い一方で、人文科学系が少ない。専門学科では理工系31%、人文科学系2%であるのに対して、普通科では理工系21%、人文科学系21%である。

普通科出身者では奨学金利用率が28%であるのに対して、専門学科出身者では56%となっている。家庭の経済状況について「豊か」「やや豊か」とする比率は、普通科33%、専門学科18%である。専門学科出身者は、実学志向もあって、理工系に進学することが多い。また、高校での教育課程の違いから推薦入試を利用しなければならず、私立に進むことになる。相対的に豊かでない家計から私立理工系の学費を出さなければならないため、奨学金利用率が高くなっていると考えられる。

期待はずれの大学生生活

大学生生活全体の満足度を尋ねると、普通科では「とても満足」21%、「やや満足」58%、専門学科では「とても満足」18%、「やや満足」56%で、専門学科でやや低いものの明確な違いではない。ただし、「できることなら転学部・転学科したい」に「よくある」「ときどきある」と回答した比率は、普通科19%に対して専門学科32%と、はつきり異なっている。

この背景には、多くの大学が実学志向というよりもアカデミック志向であることや、期待していた資格や技術が身につけられないといった事情があるだろう。また、「単位をそろえて卒業さえできればいい」に「とてもあてはまる」とする比率が、専門学科出身者では普通科出身者のほぼ倍となっている（普通科11%、専門学科21%）。取得単位数や成績をみると普通科と専門学科の違いはほとんどないが、それでも専門学科出身者では入学前の期待がはずれて、積極的な勉学意欲が失われていることが示唆される。

大学のアカデミック志向に対する違和感、次のような点にも見受けられる。「大学在学中に留学したい」に「とてもあてはまる」「まああてはまる」と回答した比率が、普通科では33%であるのに対して、専門学科では18%にとどまる。同様に、「大学院に進学したい」は普通科27%、専門学科22%と、専門学科が普通科を下回る。経済的な条件を考慮して留学や大学院進学を希望しないのかもしれないが、実現可能性を斟酌する必要のない質問であり、やはり専門学科出身者はアカデミックな世界に長くとどまることや、その世界を広げることに関心な傾向にあるとみることができる。

4. まとめにかえて

以上、専門学科からの進学者の特徴を、大学入学以前と入学後について、データにもとづいてみてきた。その像は次のような

ものである。教育課程の関係から推薦入試を利用せざるをえないが、高校で学んだことをいかし、資格・技術を身につけて大学卒業後は就職したいと考えて進学する。入学後は学費負担を重く感じつつ奨学金を受けて生活を送る。そうした大学生活の中で、次第に大学が期待に応えてくれないことに気づき、積極的な意欲が失われ、進路選択を間違ったかもしれないと感じ始める。こうした大学生を生み出すだけならば、専門学科からの進学は、あまり実りあるものとはいえないだろう。

専門学科からの進学を実りあるものにするためには、高校と大学の双方が高校でのカリキュラムや大学の教育内容について情報を共有し、進学者が期待するスムーズな接続が可能になる体制を築く必要がある。また、経済的な支援も視野にいれるべきだと考えられる。

(注)

1) 本稿では、併置校を考慮して、「専門高校」ではなく「専門学科」をもちいる。

2) この調査については、石田浩・荻谷剛彦「高校生の進路の変遷」厚生労働科学研究費補助金政策科学推進研究事業『若年者の就業行動と意識・少子高齢社会の関連に関する実証研究 平成16年度 総括研究報告書』(2005)を参照のこと。なお、2004年10月調査では、2004年1月調査で追跡調査への協力を承諾した2,036名を対象とし、それ以降の調査では住所不明となったサンプルを除外しつつ実施されている。

(東京大学社会科学研究所助教授／社会工学)

付 録

高校卒業後の生活と意識に関するアンケート

<調査票A：何らかの職業についている方（学生アルバイトを除く）用>（クリーム色）

「高校卒業後の生活と意識に関する調査」研究会

※ 現在、4年制大学・短大・専門学校・職業訓練校のいずれかに通っている方は調査票B（薄ブルー色）、
就労も通学もしていない方は調査票C（グリーン色）にご記入ください。

まず、あなたの状況についておうかがいします。

問 1. あなたの現在の状況は、次のどれにあたりますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

- | | |
|---|--|
| 1 | 正社員として働いている |
| 2 | 公務員（臨時採用を除く）として働いている |
| 3 | 自営業主として働いている |
| 4 | 家族従業者として働いている |
| 5 | 非正社員（臨時雇用、パート、アルバイト、登録型派遣社員など）として働いている |
| 6 | その他（具体的に： _____） |

問 2. あなたが現在についている仕事についておうかがいします。(a)には、数字を記入し、(b)～(d)には、それぞれあてはまる番号1つに○をつけてください。(e)には、具体的な仕事の内容をお答えください。

(a) その仕事を始めたのはいつですか（就職時期）。

(西暦) 年 月

(b) 業種

- | | | | |
|---|-----------------------|----|----------------------------|
| 1 | 農林漁業・鉱業 | 9 | 金融・保険業 |
| 2 | 建設業 | 10 | 不動産業 |
| 3 | 機械器具製造業（電気機器・自動車製造など） | 11 | 個人サービス業（ホテル・理美容など） |
| 4 | その他の製造業 | 12 | 情報サービス・調査・広告などのサービス業 |
| 5 | 電気・ガス・熱供給・水道業 | 13 | 医療・保健・福祉などのサービス業 |
| 6 | 運輸業 | 14 | その他のサービス業（リース、保安、業務請負業を含む） |
| 7 | 通信業 | 15 | 公務員 |
| 8 | 卸売・小売業、飲食店 | 16 | その他（具体的に： _____） |

(c) 企業規模（本社・支社などすべて含めた従業員数、パート・アルバイトは除く）

- | | | | | | | | |
|---|--------|---|----------|---|----------|---|-----|
| 1 | 29人以下 | 3 | 100～299人 | 5 | 500～999人 | 7 | 公務員 |
| 2 | 30～99人 | 4 | 300～499人 | 6 | 1000人以上 | | |

↓
(2ページに続きます)

(d) 職種

1	受付、経理、一般事務などの事務職	8	自動車整備・組立作業・機械のオペレーターなどの技能職
2	販売、外交、セールスなどの販売職	9	SE・プログラマーなどの情報関係の技術職
3	大工・左官、建具師などの職人的仕事	10	設計や工程管理などを行う技術職
4	土木工事などの現場作業	11	理・美容師、調理師などのサービス職
5	介護や看護など福祉・医療関係の仕事	12	ウエイター・ウエイトレス、ホテルマンなどのサービス職
6	運輸（トラック運転手、配達員など）	13	その他（具体的に： _____）
7	保安（守衛や警備、消防、警察、自衛官など）		

(e) 具体的な仕事の内容

【記入例】〇〇工場でプラスチックおもちゃの製造／大手スーパー（△△社）での夜間レジ業務のアルバイト／化粧品の外回り営業

問 3. 現在の仕事に応募した方法として、あてはまる番号1つに○をつけてください。

1	学校の推薦や紹介で	6	インターネットや携帯電話の求人サイトを利用して
2	公務員の一般公募で	7	求人ポスターをみて
3	家族・知人・先輩の紹介で	8	アルバイト先だった
4	就職情報誌や新聞広告をみて	9	職業安定所（ハローワーク）で求人を見て
5	新聞などのおりこみ広告をみて	10	その他（具体的に： _____）

問 4. 現在の仕事について、次のようなことはあてはまりますか。A～Iのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	やや あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない	わからない
A. 希望していた職種である……………	1	2	3	4	5
B. 有名な会社である……………	1	2	3	4	5
C. 給料がよい……………	1	2	3	4	5
D. 残業が少ない、休日が多い……………	1	2	3	4	5
E. 高校で学んだことが生かせる……………	1	2	3	4	5
F. 先輩が仕事についてよく教えてくれる……………	1	2	3	4	5
G. 研修機会に恵まれている……………	1	2	3	4	5
H. 出産・育児休業を取得しやすい……………	1	2	3	4	5
I. 子育てしながら働きやすい制度（短時間勤務、フレックスタイム、託児施設の設置など）が整っている……………	1	2	3	4	5

問 5. この半年間に、通常の業務とは別に、講習や実習などの教育訓練を受けたことがありますか。
 あてはまる番号 1 つに ○ をつけてください。

1 受けたことがある 2 受けたことがない → 問 6. へ
 ↓
 付問 5-1~3 へ

(問 5. で 1 と答えた方は、最近受けたものについてお答えください)

付問 5-1. その期間はどれくらいでしたか。あてはまる番号 1 つに ○ をつけてください。

1 3 日間 2 4 ~ 6 日間 3 1 週間 ~ 1 ヶ月未満 4 1 ヶ月以上

付問 5-2. その内容はどのようなものでしたか。あてはまる番号 すべて に ○ をつけてください。

1 働くことの大切さ、社会人としての心構え	8 会社の概要
2 接客の仕方、電話のかけ方	9 特定資格取得のための講習
3 経理、簿記	10 新技術、設備導入のための講習
4 文書の書き方	11 昇進にあたっての講習
5 情報処理、パソコン	12 外国語
6 取り扱い商品に関する説明	13 その他(具体的に:)
7 製造工程、設備、機械についての説明	

付問 5-3. その研修は役に立ちましたか。あてはまる番号 1 つに ○ をつけてください。

1 とても役に立った 2 まあ役に立った 3 あまり役に立っていない 4 まったく役に立っていない

問 6. 現在の職場で、次の点についてどの程度満足していますか。 A ~ I のそれぞれについて、あてはまる番号 1 つに ○ をつけてください。

	とても満足	やや満足	やや不満	不満
A. 労働条件(給料) ……………	1	2	3	4
B. 労働条件(労働時間) ……	1	2	3	4
C. 労働条件(休暇) ……………	1	2	3	4
D. 昇進や昇格の機会 ……………	1	2	3	4
E. 技術や知識習得の機会 ……	1	2	3	4
F. 上司との人間関係 ……………	1	2	3	4
G. 同僚との人間関係 ……………	1	2	3	4
H. 会社の事業の内容 ……………	1	2	3	4
I. あなたの仕事の内容 ……………	1	2	3	4

問 7. あなたが仕事（副業を含む）から得る手取り収入は、1ヶ月平均いくらぐらいですか。
あてはまる番号1つに○をつけてください。

1	5万円未満	4	12～14万円未満	7	18～20万円未満
2	5～10万円未満	5	14～16万円未満	8	20～22万円未満
3	10～12万円未満	6	16～18万円未満	9	22万円以上

問 8. あなたは現在、生活費をどのようにまかなっていますか。あてはまる比率（%）を例にならって、合計が100%になるように記入してください。

	親	貯金や アルバイト	定職収入	その他
【記入例】定職収入で90%、親から10%まかなっている場合	10 %	0 %	90 %	0 %
生活費.....	%	%	%	%

問 9. 現在のあなたのお宅の暮らし向きは、この中のどれにあたるでしょうか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

豊か	やや豊か	ふつう	あまり豊か ではない	豊かでは ない	わからない
1	2	3	4	5	6

あなたの日常生活についておうかがいします。

問 10. あなたには日常生活において、A～Iのそれぞれについて、困ったり悩んだりしたことがどれほどありますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

	よくある	少しある	ない
A. 友だちとの人間関係について.....	1	2	3
B. 家族との人間関係について.....	1	2	3
C. 職場やアルバイト先での人間関係について.....	1	2	3
D. 暮らしおき（収入）について.....	1	2	3
E. 時間のゆとりについて.....	1	2	3
F. 健康について.....	1	2	3
G. 恋愛について.....	1	2	3
H. 仕事について.....	1	2	3
I. 将来について.....	1	2	3

問 11. 次のような事からは、あなたにどれほどあてはまりますか。A～Jのそれぞれについて、あてはまる番号1つに○をつけてください。

	とても あてはまる	少し あてはまる	あまり あてはまらない	まったく あてはまらない
A. 健康に気づかって生活している……	1	2	3	4
B. 健康である……	1	2	3	4
C. 異性と知り合う機会がない……	1	2	3	4
D. 異性と打ち解けられない……	1	2	3	4
E. とくに好意を抱いている異性がいる……	1	2	3	4
F. 子どもとの接し方がわからない……	1	2	3	4
G. 子どもが好きだ……	1	2	3	4
H. 身近に子どもを産んだ知人がいる……	1	2	3	4
I. 経済的に安定した生活をしている……	1	2	3	4
J. 経済的に自立した生活をしている……	1	2	3	4

問 12. あなたは一日にどれほどタバコを吸いますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

喫煙しない	1本未満	1～5本	6本～ 半箱未満	半箱～ 1箱未満	1箱～ 2箱未満	2箱以上
1	2	3	4	5	6	7

問 13. この一ヶ月に酒類を飲んだ機会は何回ありましたか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

飲酒しない	1～2回	3～4回	5～9回	10～19回	20回以上
1	2	3	4	5	6

問 14. あなたは、新聞をどのくらい読んでいますか。あてはまる番号1つに○をつけてください。

毎日	数日に一度	1週間に一度	月に一度	ほとんど読まない
1	2	3	4	5